

親父の野菜売るセガレ

農業を営む親父は黙って息子や娘を東京に送り出した。農家を継がず上京した子どもたちは両親や田畑のことはずっと気がかりだった。せめてもの親孝行をと、息子らは「昨年の秋、「セガレ」(悴)というグループを作り、実家の農産物を都会で売り始めた。親子の距離は少し縮まった。(浅見和生)



名古屋義数さんの作った黒豆を販売する敦さん(左)
12月21日、東京都目黒区

農業継がずとも東京で

年末年始、東京で会社勤めをする名古屋敦さん(28)は、いつもの年と同じようにふるさとの兵庫県加西市に帰省した。迎えた父、義数さん(68)は、悴が始めた東京での活動の話をニコニコしながら黙って聞いていた。

「おやじの野菜はいかがですか」「うちの父さんが作った花、どうですか」年の瀬が迫った昨年末の21日、買い物客でにぎわう東京都目黒区・自由が丘で、「セガレ」のメンバーが元気な声を響かせていた。兵庫の黒



敦さんに送るための黒豆を選別する義数さん
12月6日、兵庫県加西市、いずれも浅見和生

豆、栃木の柿、茨城のホウレン草……。各地の実家から直送された新鮮な農産物が並ぶ。月に数回、首都圏の催事会場などで販売している。「家を継いでない後継者の話も聞きたい、心の中どこかにある。実家のために出来ることを何かしたい、とみんな思っていたんです」猪起人の一人でもある敦さんはそう語る。加西の兼業農家の次男。兄は大阪で就職し、姉も結婚して家を出ている。実家には両親と祖母が3人で暮らす。

「実家のために、今出来ることを」

のメンバーに就職した。2年後の06年冬、大阪に転勤。1年ほどして仕事の悩みが募り、精神的に行き詰まった。1人になるとさらに追い込まれそうなのがして他人でも周りに人がいてほしいと、サウナやカプセルホテルを泊まり歩いた。休日は実家に帰るようになった。週末に姿を見せる次男を両親らは理由も聞かず受け入れた。

加西は播磨平野の北にある農村地帯。隣接する姫路市や加古川市で勤めながら、農業を続けている人が多い。父の義数さんも役場勤めの傍ら、酒米の山田錦や小豆、大豆などを作り、規模は大きくないが農協を通じて出荷している。定年退職後も再任用で週4日、役場で勤める一方、土と触れ合う。「私は農家に生まれ、農家に育った。田んぼや畑は生きがいやな」としみじみ話す。

息子たちに農業を継げとは言わなかった。農業だけで食っていけるとも思えなかったから。だが、帰ってくるたび、濃くなる敦さんの目の下のクマが気になり一度だけ、「いつでも帰ってきてええぞ。田んぼしたらええんや」と声をかけた。義数さんは「敦が心配やからかけた言葉や。でも、そうならたらええなと思

も、そうならたらええなと思つたんかもな」と振り返る。敦さんは「失敗しても州れる場所がある。もう一回挑戦しようかなと前向きになれた。08年9月、大学の先輩のついでで東京の小さなIT企業に転職した。

ふるさとに甘えたから、いつか恩返しをしたいという思いを抱いていた。きっかけを作るうと、農業をテーマにしたビジネススクールを受講。そこで同じように農家を継がなかった同世代の2人と知り合った。飲むと実家の話になった。07年9月に「セガレ」を立ち上げた。

児玉光史さん(29)も猪起人の一人。長野県上田市出身で大学入学以来、東京で暮らしている。アスパラガスとコマを作る農家の長男で、農学部を卒業し、農業経営のコンサルタントをするが、実家に戻る決断がまだできない。「大学入学、卒業、就職、いつも実家のことが気になってくる。セガレはそんな僕と実家をつなぐものなんです」と児玉さんは話す。

参加メンバーは増え、20人近くになった。農産物を送ってもらうため親との会話も格段に増えた。「どうしたらも

っと売れるか」と、農業についても真剣に考えるようになった。生産者の顔が見える作物とあって客の反応は良い。ただ大量販売はできず、実家からの輸送費を考えると利益を出すのは難しい。

義数さんは「セガレで売ってももうけにはならへん」とぼやくが、「ワシの作ったものを直接、東京の消費者に紹介してもらえるのは張り合いになる。それに敦が頑張ってるんやから」と、協力を惜しまない。敦さんからの発注を受ける、うれしそうにコマや豆を販売用の小口袋にせっせと詰めている。

「おもしろい息子がおつてよかった」。義数さんが最近よく口にする言葉だ。

セガレのホームページは <http://www.segare.jp>。

